

⑤ 白鳥しらとりの関せき

むかし、紀伊国きいのくに（今の和歌山県）と和泉国いずみのくに（今の大阪府南部）の国境くにぎかいに、一人の若者わかものが住すんでいた。気かの変わりやすい男で、畑はたけ仕事しごとをしていても、すぐにあきてしまうので、いつもびんぼうなくらしをしていた。ある日、くわをかついで畑にやってくると、一羽いちうの白鳥しらとりが目の前に落ちてきた。見ると、羽はねのところところに矢やがささって、飛ぶこともできずにもがいている。

「かわいそうに……。」

と言いいながら、矢やをぬいてやると、白鳥はうれしそうに鳴ないて空そら高く飛たかんでいった。

それからしばらくしたある日、美しいおすめが男の家の前でたおれて

いた。おどろいた男は、おすめをやさしくかいほうしてやった。おすめは、行くあてもない、あわれな身の上だった。おすめは、食事をつくり、せんたくをし、畑仕事をし、よく働いた。

「ここが気に入ったのなら、わしの女ぼうにょうぼう（お嫁さん）になってはくれまいか。」

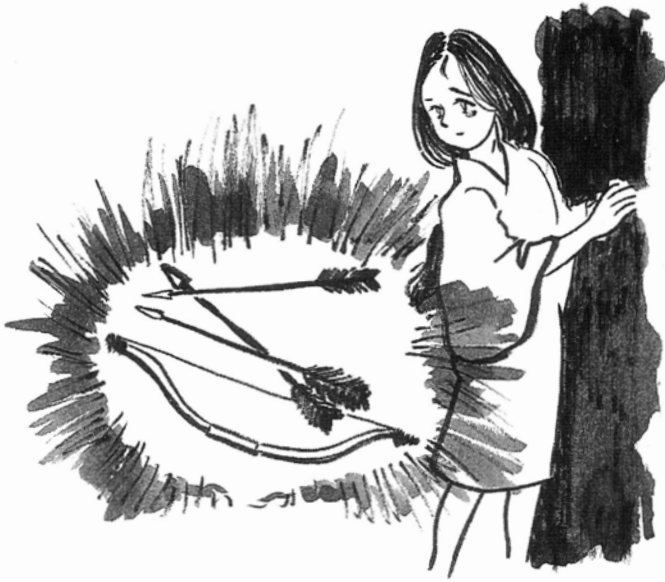
そう言うと、おすめはうれしそうな顔をした。こうして、おすめは男の女ぼうになった。男は、畑仕事にもせいを出すようになり、くらしもしだいにゆたかになっていった。

そのころ、弓矢ゆみやで鳥やけものをいることがはやりだした。男は、「ああ、みごとな弓と矢があればなあ……。弓矢がほしいなあ。」と、毎日のように言い、畑へも行かず、家の中でごろごろとねていた。ある夜、男はみょうなゆめを見た。

「今まで、いっしょにくらしていましたが、お別れの時が来ました。わ

たしのかわりに弓矢を置いていきますから、大切にしてください。」
と、女ぼうが言った。

あくる朝、男が目をさますと、女ぼうのすがたは見えず、かわりにみ
ごとな弓と矢が置いてあった。



男は、その日からかりにおちゅうになっ
た。

しかし、日がたつにつれ、男は、かりに
あきてきた。そうになると、女ぼうのことが、
なつかしく思い出されてくる。

「ええい、こんなもん。」

と、男が手に持っていた弓矢を地べたにた
たきつけると、たちまち美しい白鳥となっ
て羽音はおとをたてて、青い空に飛び立たった。



男は、あわてて白鳥の後あとを追いかけた。
国境くにざかいの近くちかにまいおりた白鳥にかけ
よった。

そのとたん、ふしぎなことに白鳥のす
がたが消きえ、そこに、なつかしい女ぼう
が立たっていた。

「あつ、おまえは！こんなところにいた
のか。さあ、いっしょに帰ろう。」

そう言うと、男は女ぼうの手をとろう
としたが、女ぼうは、

「わたしは、もう帰れないのです。」
と、なみだをこぼした。なみだにぬれた
ところが、みるみるまっ白な羽に変わり、

やがて美しい白鳥になって、空高くまい上がった。

「待ってくれ、行かないでくれ！わしが悪かった。心を入れかえるから、帰ってきてくれ。」

男は、白鳥の後を追いかけているが、必死ひっしにさけび続けた。
白鳥は、山のかなたへ消えていってしまった。